

題 目 聴覚障害児を持つ保護者の障害認識支援のための実践的研究

本研究では、聴覚障害児を持つ保護者がどのように子どもの障害を認識するのか、認識を進めるために必要な支援はどのようなされてきたのか、これからの支援の方向性について考察し、具体的な支援体制について検討することを目的とした。保護者支援については、これまで多くの研究がされているが、いずれも保護者が指導者（支援者）に何を求めているのか、や支援する側の保護者支援に対する認識の持ち方を変換する必要性について述べたものが多い。しかし、保護者の子育てのプロセスを追って検討したものはない。

第1章では、まず聴覚障害児教育（療育）の動向について先行研究を追い、その歴史の中で、保護者支援がどのような視点でとらえられてきたのか、また保護者の障害認識はなぜ重要視されるようになってきたのか、を振り返った。聴覚障害児への療育・教育では、言葉と聴こえについての専門的支援が中心だったが、新生児聴覚スクリーニングにおける超早期発見の拡がりの結果、子育てそのものへの支援の必要性が高まってきたことがわかった。

第2章では、児童福祉法の一部改正により2012年から児童発達支援センターとなった難聴幼児通園施設に保護者支援の現状について質問紙を送付し、施設が認識している保護者支援の課題と現状について分析した。保護者支援は個別に関わることが重要で、個別の保護者支援がなければ、療育・教育が始まらないケースも多く、新しいシステム下では十分な保護者支援ができないジレンマを施設が抱えていることがわかった。

第3章では、コミュニケーションモードに手話を併用した年に難聴幼児通園施設に入園し、3年間を過ごした聴覚障害児の保護者9名にインタビューをし、保護者の語り、手話導入当初、3年間の手話使用、将来の手話使用の3つに分け、それぞれ分析を行なった。インタビューの結果から、手話を使用することが、子どもが聴覚障害であるということを認識する引き金となり、音声言語だけでなく手話を併用した方がよりスムーズなコミュニケーションを築けることに保護者は喜びを感じていることがわかった。聴こえる子どものように育てる、のではなく、手話を使用すれば聴こえる子どもと同じようにコミュニケーションを結ぶことができるという喜びと安心が、子どもを肯定的に捉え、聴覚障害を認識する営みにつながっていると考えられた。

第4章では、さらに、インタビューした9組の中の1組の母子を抽出し、3年間の施設職員との交換ノートグラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析した。母親が子どもの障害について不安を抱えながらも、子どもと通じ合うプロセスの中で、聴覚障害があっても通じ合う手段（手話）を得てコミュニケーションを発展させ、聴覚障害に対する肯定的な認知が生まれたことがわかった。コミュニケーションができるようになると、聴覚障害児の子育ては特別なものではなく、子どもにわかるように歩み寄りながらコミュニケーションを積み重ねていくものであることを母親が学習し、母親の自己肯定感を高めていることも記録からわかった。また、母親の障害認識は周囲のソーシャルサポートに支えられていることがわかった。

第5章では、これらの研究の結果を踏まえて、これからの保護者支援で観点となると考えられることを① 専門職連携によるアウトリーチ② コミュニケーション支援③ 成人聴覚障害者の3点を挙げた。①では既にある「こんにちは赤ちゃん事業」と新生児聴覚スクリーニングシステムを組み合わせることによって、確定診断を受けるまでも受けてからも保護者に対して、聴覚障害と子育てのそれぞれの専門家が連携して支援を開始、継続することができると考えた。②ではコミュニケーション支援とは、聴こえる人の方が多き社会の中で、聴けるように話せるように練習するのではなく、聴こえる人とも聴こえない人ともコミュニケーションできる視覚的スキルを

使いこなし使い分けることができるような支援だと考えた。手話や指文字を自分の聴力に合わせて使用すること、相手によってコミュニケーション手段を使い分けることで、コミュニケーションが充実していくことを、支援者は保護者に伝えていくこと、そして、子どもが様々なモードを自分の言語として獲得していけるよう支援し認めていくことで保護者の子どもの障害への肯定感を高めていくことにつながると考えた。③ではアメリカ各州における保護者と成人聴覚者との出会いプログラムから、日本でも一定の研修のもと、保護者が成人聴覚障害者と出会うことによって聴覚障害への肯定感をもつことができるよう支援することについて提案した。